

皆

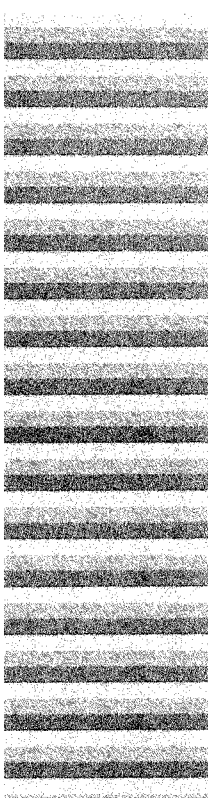
さん、こんにちは。私は都留文科大学の四年生の坂本といいます。

私

が住んでいたのは、静岡県海沿いにある、浜岡町という小さな町です。浜岡町には、特に観光地はありませんが、浜岡砂丘という広い砂丘があります。潮の流れのためか、泳ぐことは禁止されていますが、夏になれば家族連れやカップルでにぎわいます。昼のうちは海の水で遊んだり、浜辺を散歩したり、隣にある松林の公園で涼むことができますし、夜になったら友達と話をしたり、花火をするために集まります。砂丘という名の通り、海にたどり着くまでには砂の丘を登らなければならず、私の小さいころは、急な斜面を利用し、ダンボールで滑って遊んでいました。今では丘もなだらかになってはいますが、それでも久しぶりに登ると少しつらいです。私が長期の休みで浜岡町に帰省したとき、特に出掛ける先が決まっていなかった時は砂丘に友達と一緒にふらつと出掛けて、砂浜に座ってお互いの近況報告をしたり、友達のことやバイトのこと、家族のことを話して過ごします。私たちにとって、最も身近で落ち着ける場所の一つでもあります。高校生のころは、遊ぶところのない浜岡町がとても嫌で、もっと遊ぶところのたくさんある市街に住みたいと思っていました。町内に「光と緑と人のオアシス」と書いてある大きな看板が建った時も、「緑のオアシスって要は田舎ってことね」と思っていたのです。山に囲まれた自分の家が嫌でした。しかし、今、自分の家の周りの田んぼや畑に家が建っていくのを見てみると、なぜか淋しい気持ちになってしまいます。都留にきたことで、改めて18年間育ってきた浜岡町の良さに気づき、心の落ち着く場所だということがわかるようになったのです。今は浜岡町を、私の自慢の故郷だと胸を張って言うことができます。

大

学生になって、都留市で生活を始めた時、私は自分の気持ちの変化に気づき始めました。私はもともと、一度出掛けたらその場所に愛着がわき、何度でも訪れたいと思うタイプの人間です。都留市にきたばかりのころは、「卒業してもまた来るかもしれない」と思いながら、いろ



魅力ある町へ

～第2のふるさと都留市～

国文学科4年 坂本彩子



文大生の 故郷と都留

12

いるな所を探索していました。初めて入った文房具屋さんで、店番をしていたおばあちゃんと話をしたり、自分の気に入った場所を見つけると、友達と出掛けてお菓子を食べたりするのが楽しみでした。けれど、いつの時からか、私は大学を卒業したら、もう二度と都留には来ない気がし始めたのです。そのころから、私は散歩に出掛けなくなりました。私にとって、散歩をするということには、近所の人と会って話をしたりする楽しみも含まれています。浜岡町では、知らない人でも会えばあいさつをしていました。ここにもとから住んでいらつしやる方同志では、きつと話をされているのでしようが、私が散歩中にあいさつを交わしたのには、ごくわずかでです。前のアパートに住んでいた時の大家さんは、「昔は、学生さんが布団を干しっぱなしで出掛けている最中に雨が降ったら、近所の人が入れたりしたもんだけどね。今はそんなことはないよ」とおっしゃっていました。そんな風に近所の方とつき合う学生は珍しいのでしようが、親元を離れ、一人で住んでいる学生にとって、大家さんや地元の知り合いというのは心強いものです。私も、今のアパートの大家さんと話をしているうちにお茶をよばれたり、バイト先で会った人に外で声をかけられると、とても嬉しいし、安心した気持ちになります。私も含め、学生は夜遅くまでコンビニをうろうろしてたり、コンパの帰りに騒いだりして、皆さんにご迷惑をおかけしているかとは思いますが、それでも、ここは学生の町。在学生にとっても卒業生にとっても第二の故郷です。どうか私たちが「またもどってきたい」と思える町にしてください。私もこれから、たくさんの方と会って、もっと都留の町のことを知りたいと思っています。



浜岡砂丘

